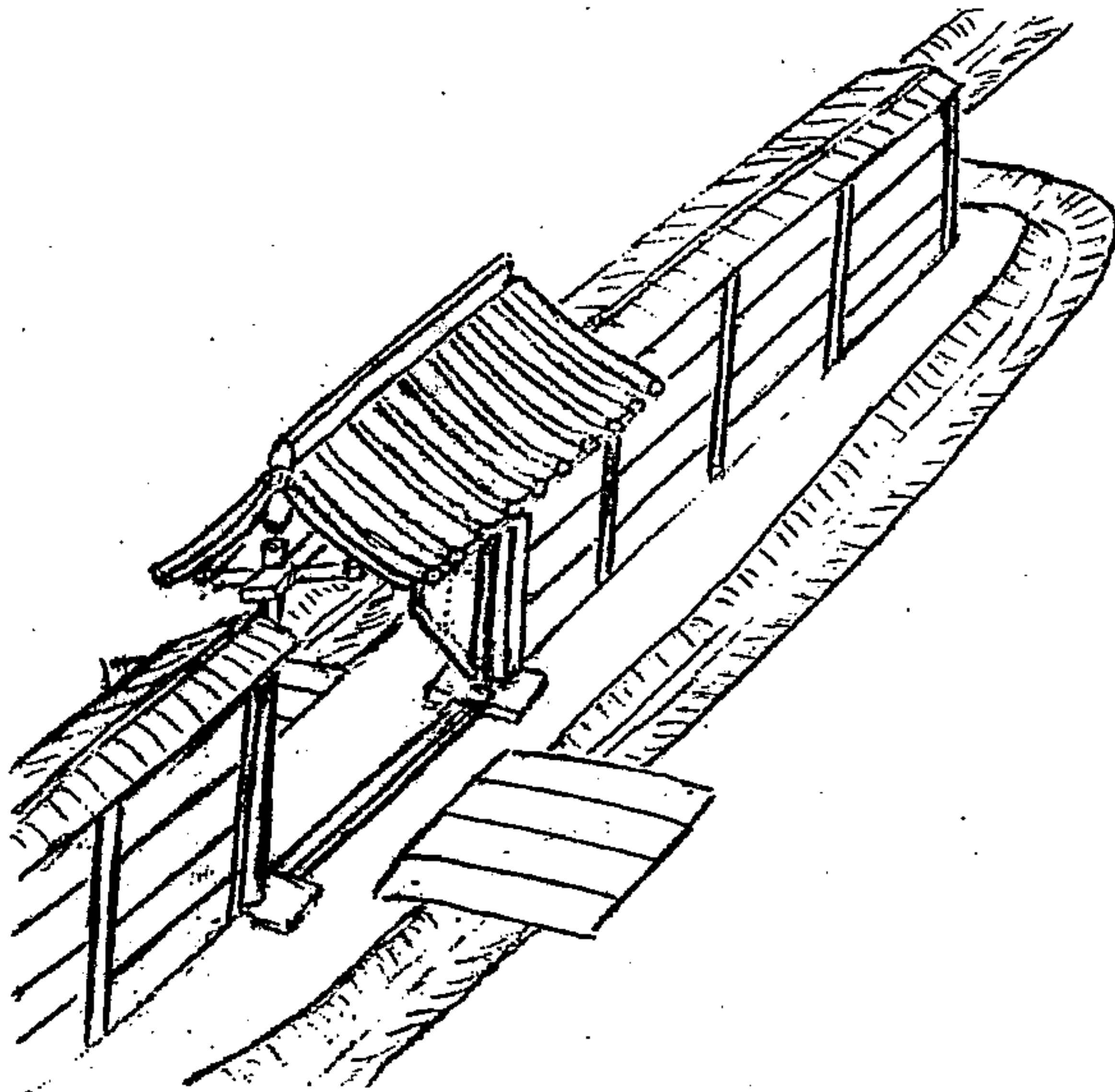


1999年10月23日(土)

東広島市西条町大字吉行

史跡安芸国分寺跡発掘調査遺跡見学会資料



財団法人東広島市教育文化振興事業団

東広島市教育委員会

I はじめに

安芸国分寺は、奈良時代、聖武天皇の命によって全国 60 余カ国に造られた国分寺の一つで、「国華」と呼ばれていたように、地方文化の粋を集めた寺院でした。そのため、この時代を代表する遺跡として国の史跡に指定されています。

東広島市及び東広島市教育委員会では、この史跡を永久に保存継承するとともに公開活用する目的で指定地の公有化を進めるとともに、創建当時の伽藍の様子を探る目的で発掘調査を進めてきました。

このたび、現、国分寺の北側、約 1,000 m²の範囲を調査し、ほぼ寺域北側の区画を確認する成果を得ることができました。

II 調査の概要

このたびの調査は、創建当時の伽藍を区画する施設がどのようなもので、どのように寺域を区画しているかを調べることを目的に行なわれました。

昨年度の調査によって寺域を区画すると見られる溝などが見つかったため、それを確認するため第 1 調査区を設定しました。その結果、2 本の溝が 1 本になっていることや、北門の跡などを確認し、この溝が主要伽藍の北側を区画するものであることが明らかになりました。

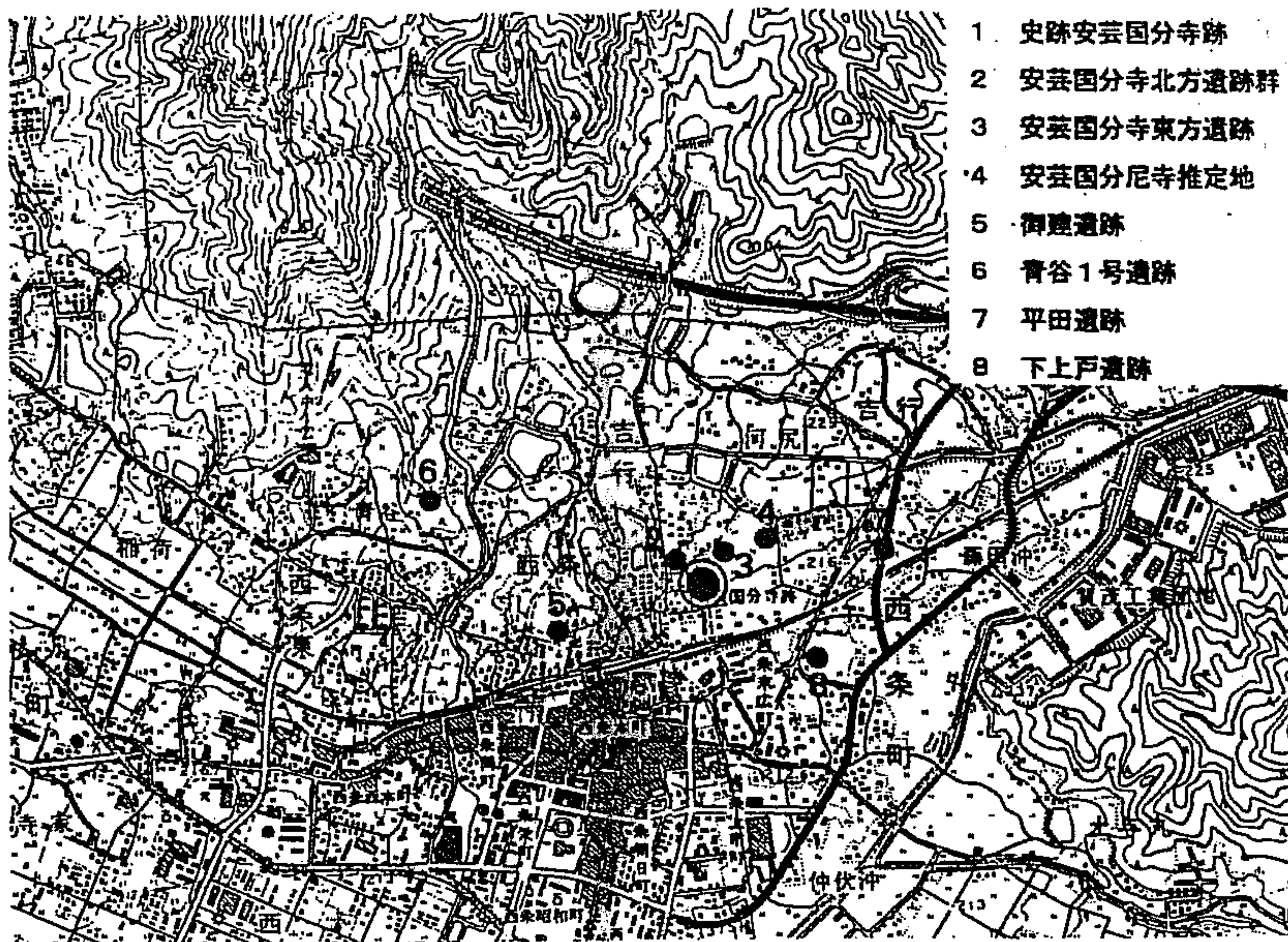
さらに、溝を追って第 2、第 3 調査区を設定したところ、第 3 調査区で南に折れ曲がっていることが明らかになりました。さらに第 4 調査区で再び東に曲がり、第 7 調査区で再び南に折れ曲がっていることを確認しました。

III 遺構と遺物

遺構

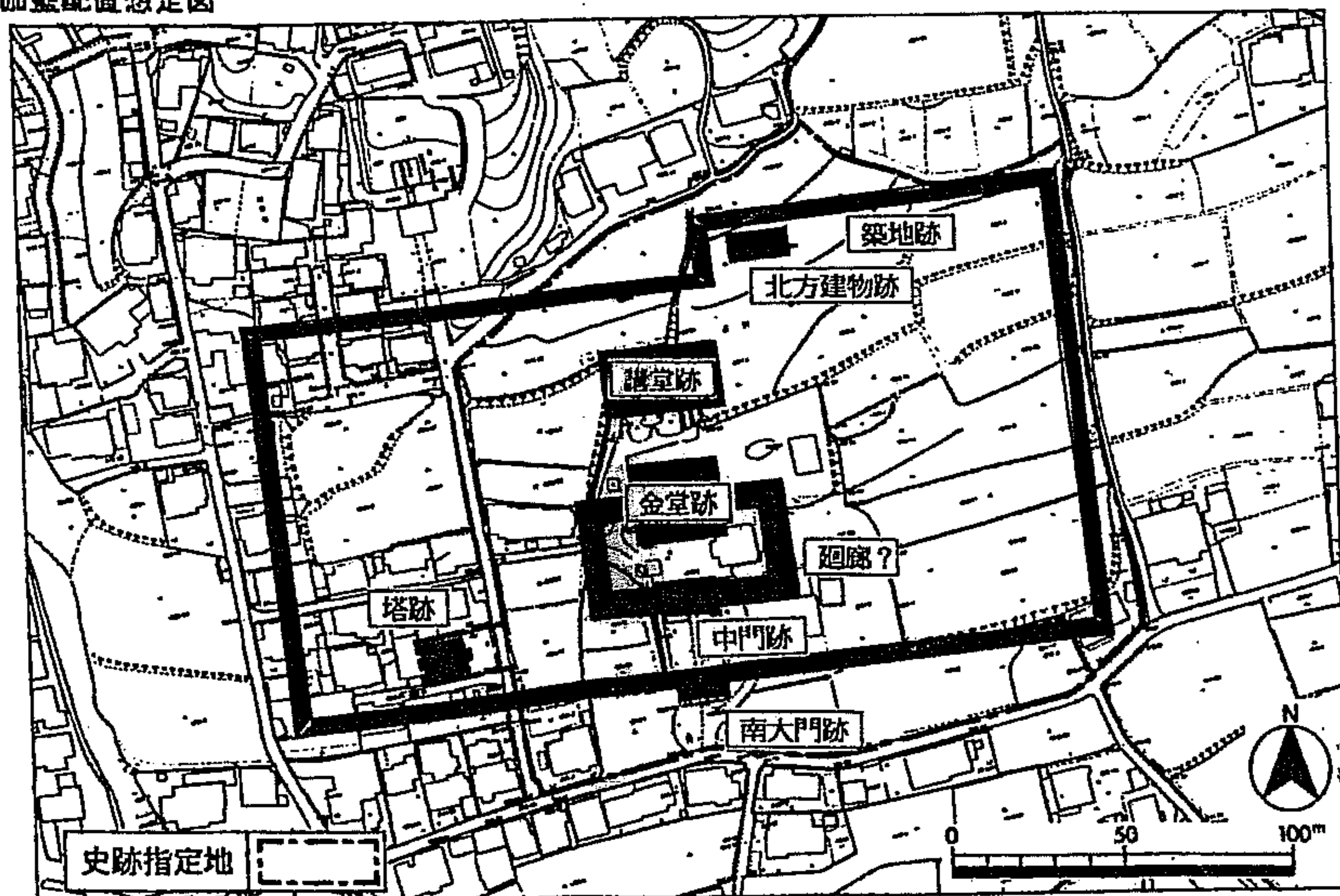
溝状遺構 1 第 1 調査区を東西に横断し、第 3 調査区で南に折れ、第 4 調査区で東に曲がり、第 7 調査区でさらに南に曲がる溝です。幅はおおよそ 1.5m～2m で、深さは約 30cm あります。

第 1 調査区では特に多量の土器類が溝の中に廃棄されており、それは火災に遭ったような焼けた土や炭などとともに出土しました。



史跡安芸国分寺跡位置図 (1 : 25,000)

伽藍配置想定図



第 1 調査区の中央付近で溝の中に大量の瓦が集中している部分があり、そこに瓦葺きの何らかの施設が想定されました。

溝状遺構 2 第 1 調査区で確認されました。溝状遺構 1 から L 字形に枝分かれし、溝状遺構 1 とともに土手状の高まりを形作っています。

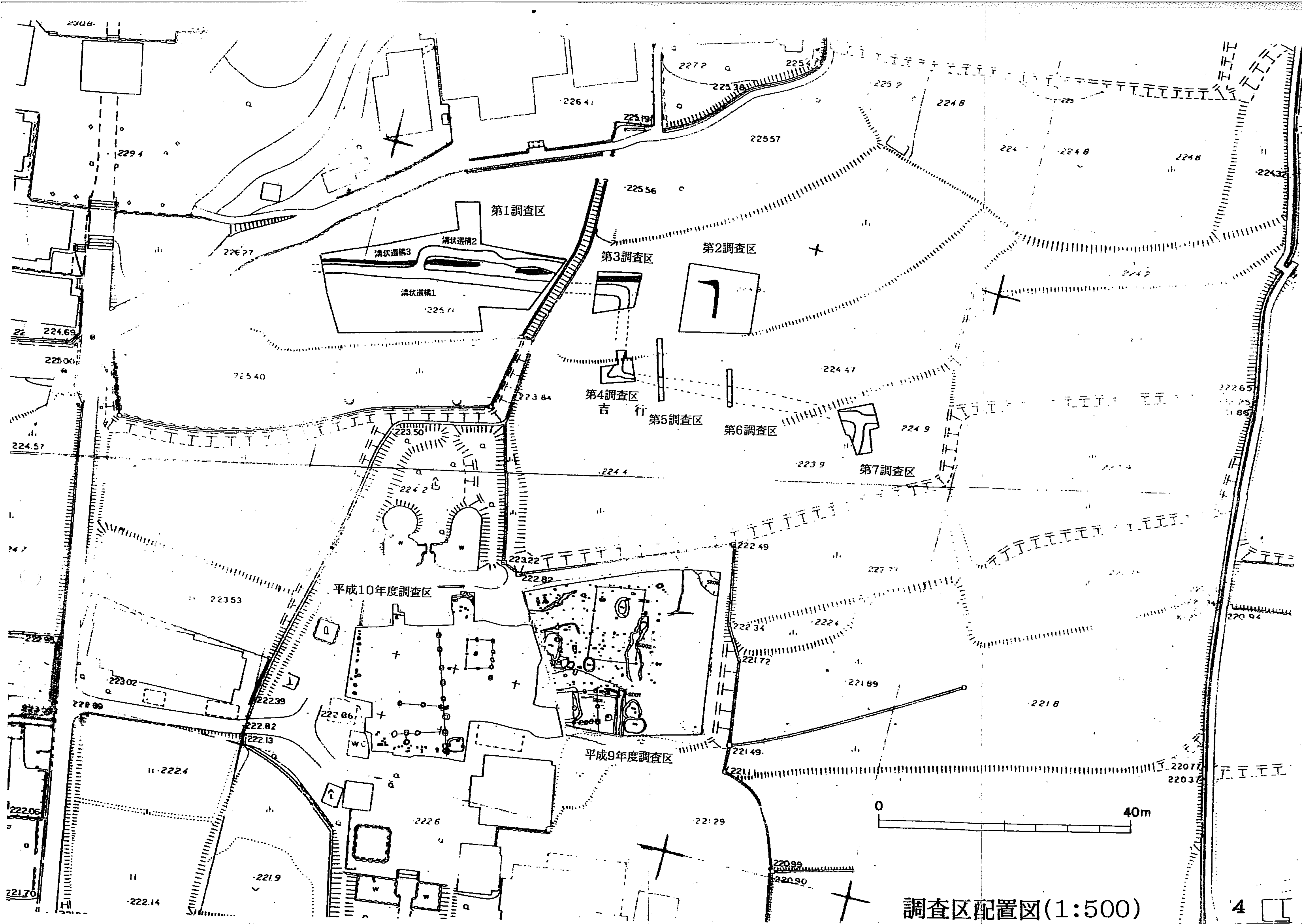
溝状遺構 3 第 1 調査区、第 3 調査区を通り、第 2 調査区で南に直角に折れ曲がっている溝です。幅は約 60 cm と小型ですが、第 1 調査区で確認されたものは箱型のしっかりとした溝でした。切り合いからもっとも古く造られたものであることがわかります。途中までは、溝状遺構 1 とほぼ平行しており、このことから伽藍の主要部を創建した時の区画施設であった可能性があります。

北門跡及び塀跡 第 1 調査区で確認されました。溝状遺構 1 と溝状遺構 2 に挟まれた土手状部分にあり、約 20m にわたって大型の柱穴が並びます。中央の柱間 1 間分だけが約 2.4m とやや広く、また、その南側に瓦が多量に落ちていたことからここに瓦葺きの北門があったことが推定されました。構造的には、2 本の柱だけで屋根を支える「一間棟門」と呼ばれる形式の門と推測されます。

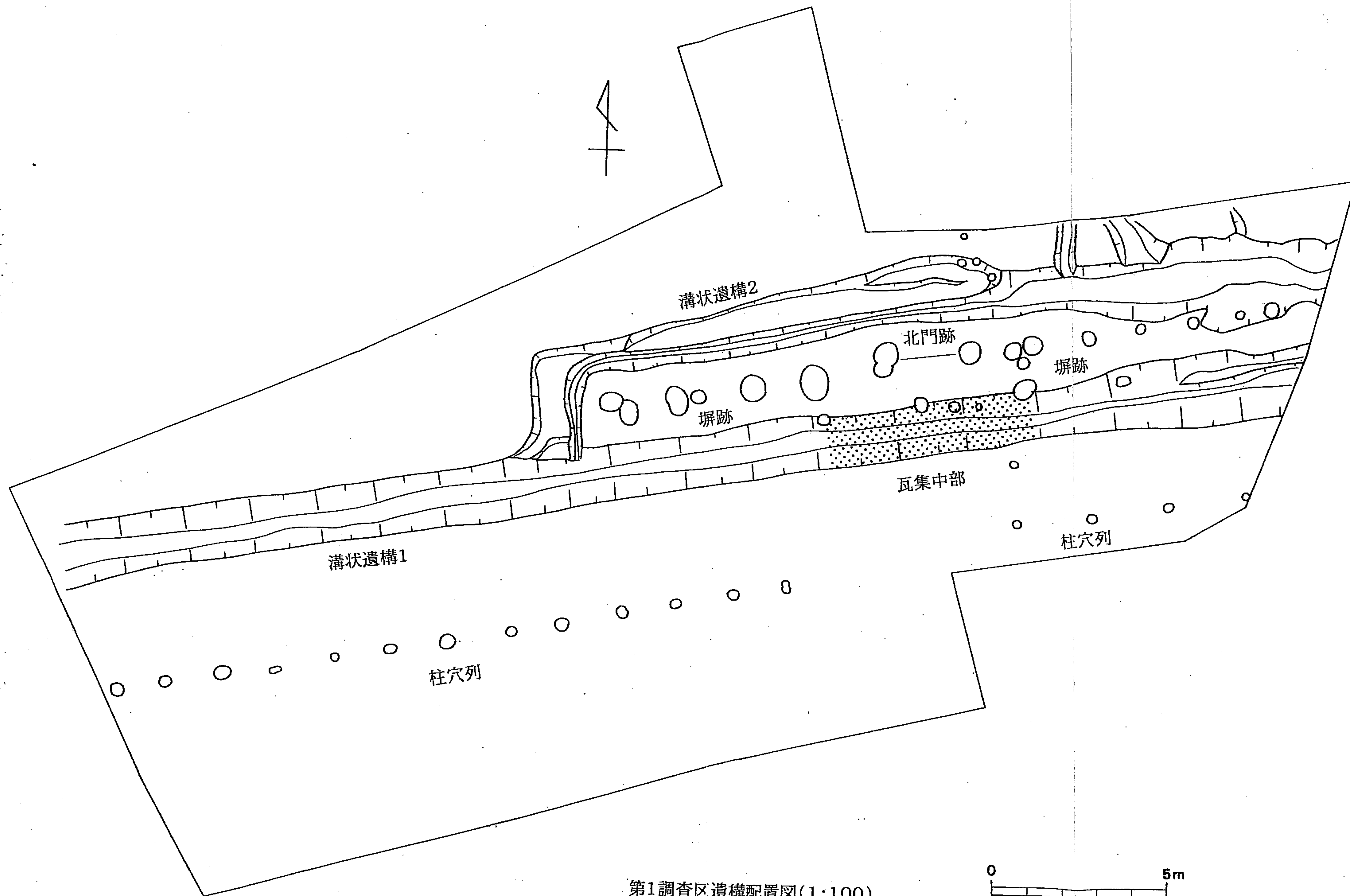
柱穴列 第 1 調査区で 2 列の柱穴列が確認されました。時代等は明らかではありませんが、2 列とも溝状遺構 1 と平行に走っており、深い関連が予想されます。

ちょうど、北門跡と推定した部分で柱穴列も途切れており、出入口となっていたと思われます。上部構造は不明ですが、柵あるいは簡単な塀のようなものが考えられます。東側の柱穴列と西側の柱穴列で柱間の間隔が異なっていることから、上部構造にも違いがあった可能性があります。

石積み遺構 第 1 調査区の東端、溝状遺構 1 の中で確認されました。長さ約 2m、高さ約 30 cm の石積みです。溝の底に石を据えるための段を造り、2 段から 3 段に小さな石や瓦を積んでいます。何に使われたものか明らかではありません。



調査区配置図(1:500)



第1調査区遺構配置図(1:100)



遺物

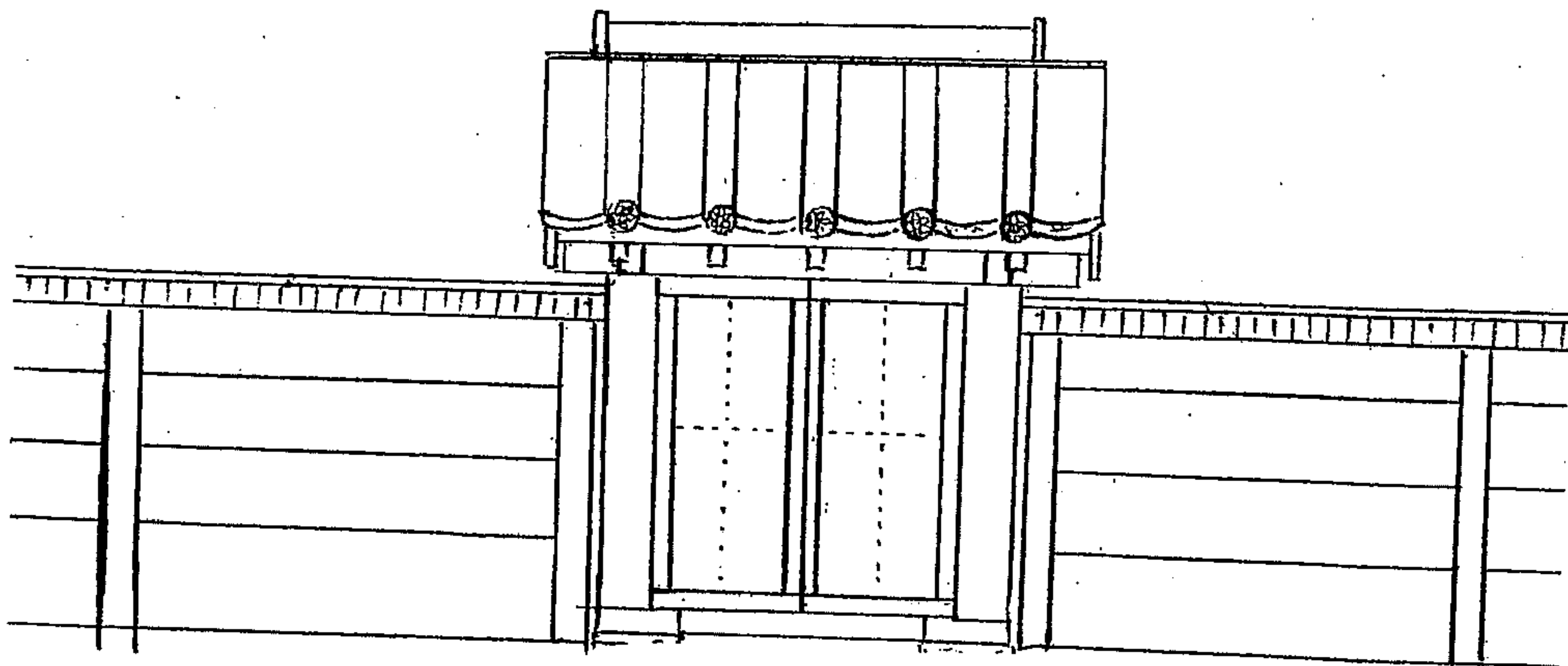
遺物は、須恵器を中心に多様な土器類が出土しました。遺物の多くは、溝状遺構 1 から出土しており、時代も 8 世紀後半から 12 世紀初頭と幅広くなっています。

特筆すべき遺物として瑠璃色のガラス塊、中国製の越州窯青磁、注口の付いた須恵器、そして、溝状遺構 1 からの出土ではありませんが、県内では初めての出土になる中国唐代の白磁碗の破片があげられます。

IV まとめ

このたびの調査で明らかになったことは、寺域を区画する施設が、少なくとも北側では、従来考えられていた築地塀ではなく板塀ないしは柵のようなものであったこと。そして寺域についても、従来、溝状遺構 1 が講堂跡の北東で北に折れ曲がり大きく東側を取り囲むと考えられていた説を大きく修正することになったことです。

北門の位置付けについては、確認された北門の位置が従来考えられていた中軸線とずれていることから、11 月から始まる推定講堂跡の調査の如何によって評価が定まることでしょう。



北門想像図